

高野山金剛三昧院蔵『十臂弁財天法』の翻刻と紹介

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47176

高野山金剛三昧院蔵『十臂弁財天法』の翻刻と紹介

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

鳥谷 武史

要旨

本稿は、高野山金剛三昧院の聖教中より見いだされた『十臂弁財天法』について、その翻刻と紹介を目的としたものである。本史料は、俗に天川弁才天と呼ばれる十臂の蛇頭人身形弁才天に関する修法の次第を書き記したものであり、現在は高野山大学図書館に寄託されている。金剛三昧院の聖教中には、本史料以外にも十臂弁才天に関わる史料が伝存しており、それらは一五世紀の末から一六世紀にかけて転写されたものと考えられる。

類本としては、先行研究にて紹介された高野山親王院蔵『十臂弁才天次第口訣』があり、同一の祖本を持つ写本である可能性が考えられる。また、十臂弁才天の由緒を物語形式で記す吉田文庫蔵『仏説大弁才天女経』は、本経と一具のものとされていた可能性がある。

本史料の内容は、十臂弁才天を本尊とする修法の過程を時系列に記述したもののだが、特筆すべきは、その中で示される十臂弁才天の尊容および眷属が、天川弁才天曼荼羅と共通する点である。また、その制作にあたっては、『金峰山秘密伝』が参照された形跡が見出される。

一六世紀の南都では十臂弁才天の絵画作例が複数制作されており、一方で本史料をはじめとする聖教が同時期の高野山で制作されていることを考え合わせれば、この二所が十臂弁才天信仰の拠点であったと考えられ、その両所を行場としていた当山派修験者が、信仰の伝播者になっていたと考えられる。

キーワード

天川弁才天、十臂弁才天、高野山金剛三昧院、当山派修験

はじめに

本稿は、高野山金剛三昧院の聖教中より見いだされた『十臂弁財天法』について、その翻刻と紹介を目的としたものである。本史料は、俗に天川弁才天と呼ばれる十臂の蛇頭人身形弁才天（以下、十臂弁才天に統一する）に関わる修法の過程を記した次第である。体裁は、縦一六・八センチ、横一六・〇センチ、全一八丁を紐で綴じた枳形本であり、表紙左上に「十臂辨財天法」、右下に「長老坊仙弘（下）」、内題に「辨財天十臂次第」とあり、奥書は「天文二〇年（一五五二）壬子九月一日書之」とされる。

本史料は、高野山金剛三昧院が所蔵し、現在は高野山大学図書館に寄託されている。目録類を参照すると、『仏書解説大辞典』第五卷^{〔一〕}に金剛三昧院所蔵の「十臂辨財天法」なる史料が紹介され、『国書総目録』第四卷^{〔二〕}にも同じく「十臂辨財天法」の名で紹介される。本史料は表題二字目に難読文字を用いており、実見したところ「臂」の異体字と見られ、十臂の弁才天を主軸に記述されていることから、正しくは『十臂弁財天法』とすべきであろう。

類本

金剛三昧院の聖教中には、本史料以外にも十臂弁才天に関わる史料が伝存している。表題と筆者のみを挙げると、①『**3** 神十臂次第(長祐)、②『**辨財天供十臂**』(良識)、③『**大辨財天女経并表白神分**』(快英)、④『**弁才天 天川**』(良識)の四点が、管見の限り見出され、これらは、⑤『**弁才天 三宝院**』(良恩)と表題のある八臂宇賀弁才天経とともに、『**辨才天秘法種々**』と書かれた紙で一括されている。⑤は同寺第三十代長老の永智房良恩、②④は三十一代長老の善識房良識によって筆記されたとみられ、ともに一五世紀後半から一六世紀前半の人物である。

①②は、細かい差異があるものの、おおよそ『**十臂弁財天法**』より、『**表白**』『**入我我入**』『**塔印**』を省略し、『**結願作法**』以下を削った形となっており、あるいは、これを増補したのが『**十臂弁財天法**』であるかもしれない。なお、②の末尾には、『**十臂弁財天法**』の『**本書曰**』にあたる文章が異筆によって加えられている。③は後述の吉田文庫蔵『**仏説大弁才天女経**』の般若に關わる部分を削り、後半に表白を増補した構成となっており、奥書からは、快英なる僧が、天文一四年(一五四五)に筆写したことがわかる。また、④は八臂弁才天の修法次第だが、道場観などが後述の『**金峰山秘密伝**』下巻『**大弁才功德天法**』に共通し、これを増補したものと考えられる。

他に本史料の類本として注目されるのは、大森照龍氏が紹介された高野山親王院蔵『**十臂弁才天次第口訣**』二帖である⁽³⁾。大森氏の解説によれば、十臂弁才天に関する修法次第であり、尊容や眷属に関する記述のほか、法光大師真雅の名が見出される点も共通している。ただし、同口訣の奥書は「第一の転写を「**天正八年(一五八〇)**」とし、本帖を「**貞享四年(一六八七)**」の第二転写」とする一方で、『**十臂弁財天法**』には天文二〇年(一五五二)九月一日の奥書があることから、

後者は前者の第一転写時期よりも先んじて筆記されたことがわかる。翻刻は掲載されておらず、諸事情により実見することがかなわなかったため、現時点では比較する手段がないが、『**十臂弁財天法**』は、『**十臂弁才天次第口訣**』の祖本、もしくは同一の祖本を持つ写本である可能性が考えられよう。

『**仏説大弁財天女経**』との関係

また、中世に遡る十臂弁才天関係偽経としては、伊藤聡氏によつて紹介された吉田文庫蔵『**仏説大弁才天女経**』がある⁽⁴⁾。冒頭には「**安藝ノイツク嶋ノ大辯才天ノ祭文**」とあり、奥書によれば、大永六年(一二二六)に「**有日**」なる僧が記し、『**福智院**』に所蔵されていた本を、大永七年(一二二七)に吉田兼満が写したものである。本経が『**十臂弁財天法**』と共通するのは、文字通り十臂弁才天の尊形を記す点である。伊藤氏による要旨を引用すれば、「尊容の説明の後、如来これを讃じて、我滅度の後もこの弁才天女、その手にしたる如意宝珠の秘法を以て一切衆生を救わんと証し、その印呪を示し、彼本は妙音天であり、後に普見仏と成ぜんことを授記する」といった構成となっている。尊形に関する内容は『**十臂弁財天法**』の道場観に共通するものの、前後の文脈などに異なる部分が多く、また、天川弁才天曼荼羅をもとに作成された可能性が高いという。たしかに、『**十臂弁財天法**』の道場観において「**三王子**」「**水火二天**」「**吉祥訶利帝**」とされる眷属を、それぞれ「**蛇頭ノ人形ノ立像**」「**女人**」「**天女**」と表記するなど、天川弁才天曼荼羅に描かれたままを記述しているかのような表現である。以上のように、両者の間には相違が認められるが、『**十臂弁財天法**』の二丁表内題下に「**付十臂弁財天女経**」とあることに着目すると、本来は一具になっていた可能性がある。

道場観と天川弁財天曼荼羅

『十臂弁財天法』の内容は、十臂弁才天を本尊とする修法の過程を時系列に記述したものである。壇前での普札から始まり、印呪・表白など、道場観を含む一連の作法を述べ、後半には、結願作法のほか、同修法の由緒を語り、最後に真雅に仮託した口伝が記される。特筆すべきは、道場観を中心に述べられる十臂弁才天の尊容および眷属が、親王院・能満院・石山寺などに所蔵される天川弁才天曼荼羅と共通する点で、先述の『十臂弁才天次第口訣』、『仏説大弁才天女経』と並び、同曼荼羅と直接的な関係を有する数少ない史料に挙げられよう。

実際の作例と比較すると、十臂の持物は、左第一手を如意宝珠、第二手を瓔珞、第三手を乳粥、第四手を宝珠、第五手を宝経、右第一手を如意宝珠、第二手を釜、第三手を甘露、第四手を宝珠、第五手を鍔とする。また、三体の蛇頭人身像は三王子といい、印呪により、第一王子が玉女神、第二王子が愛敬神、第三王子が大黒天に配当されていることがわかる。足元および左右の女性像は、前者が水天・火天、後者が吉祥天・訶梨帝母であることがわかり、その他、弁才天の周囲に台・瓶・宝珠・牛王を配するという。弁才天の尊容に加え、眷属も後述の弁才天三部経と異なっており、三大王子・四大眷属（水天・火天・吉祥天・訶梨帝母）・迦楼羅・善女龍王・十五童子のうち、十五童子以外は三部経に見られない尊格である。

この道場観に関して注目される史料が、『金峰山秘密伝』である⁽¹⁶⁾。同書は三巻本の体裁をとり、宮家準氏の論によれば、真言系修験者によって十三世紀末に撰修されていたものを、弘真房文観が醍醐天皇に進上したものである⁽¹⁷⁾。上巻「天河弁才天習事」では、本地・尊像などを記すが、像容は二臂・八臂・六臂の弁才天のみに触れ、十臂に関しては「又有三十臂ノ像」。尋レ之矣」との指摘に止まる。また、下巻「大弁才功德天法」においても、十臂の存在は示唆されるものの、

像容に関する記述はなく、道場観は、八臂弁才天の像容が述べられるにとどまっているが、像容、眷属、軍神的性格を示す内容以外の記述は、『十臂弁財天法』の道場観と全く一致している。さらに、「大弁才功德天法」においては、三種の種子が宮殿・蓮華・宝珠に変じ、弁才天となることが語られるが、『十臂弁財天法』の道場観の中でも、種子は異なるものの、同様の過程が語られている。よって、『十臂弁財天法』が制作されるにあたっては、『金峰山秘密伝』、あるいはそれに類する史料が参照されたと考えられよう。

高野山と南都の関係

一六丁表より一六丁裏にかけて、「本記曰」とされる十臂弁才天およびその修法にまつわる由緒が示されている。それによれば、十臂弁才天は『弁財天七経』のうちにはない特殊な尊容をしており、「東寺一家ノ持尊」であり、天川は並びない霊地であるために、空海は同地において七年の修行をおこない、ひとえに十臂弁才天の法によって高野山を開山したという。また、天川は役行者によって開かれ、その後にくる参詣者は一人として所願成就しない者はおらず、この修法をおこなった者は悉く願いが叶うとされる。

『弁財天七経』については、その具体名が挙げられないが、天川弁才天以外の尊形をとる弁才天を記述したものであるらしい。中世以降、弁才天関係經典の主流となったものに、『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼経』『仏説即身貧転福得円満宇賀神将菩薩白蛇示現三日常成就経』『仏説宇賀神王福得円満陀羅尼経』『仏説大宇賀神功德弁才天経』『大弁才天女秘密陀羅尼経』があり、前三経を合わせて「弁才天三部経」、さらに後二経を加えて「弁才天五部経」と呼ばれる。三部経に含まれる三経に比して、五部経で加えられる二経は比較後的時代に作られたとの指摘もある⁽¹⁸⁾。それら呼称の成立時期に関して、

伊藤聡氏は、「三部経については貞享四年（一六八七）刊の潮音『弁財天三部経疏』辺りからであり、五部経についても貞享二年（一六八五）成立の浄厳『大弁才天秘訣』下や元禄五年（一六九二）刊の瑞心『寂照堂響集』第五に見えるのが早い例」と指摘している^{（八）}。一方、本史料は、伊藤氏が紹介される一七世紀後半の經典類に比して一世紀ほど遡るため、三部経・五部経との関係は不明である。ただし、四丁表に「頓得経」の語が見えることから、「仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼経」、「仏説宇賀神将十五王子頓得如意宝珠経」のいずれかを含むものであろう。なお、この二経が異本関係にあたるとの指摘もある^{（九）}。

いずれにせよ、本史料が高野山・天川との関係において語られることは重要である。先述の『仏説大弁才天女経』奥書にある「福智院」が高野山福智院を指すとすれば、金剛三昧院蔵『十臂弁財天法』『大辨財天女経并表白神分』、親王院蔵『十臂弁才天次第口訣』のいずれもが、一六世紀の高野山で制作されたものということになる。

一方、『大乘院寺社雜事記』長享元年（一四八七）十二月二十三日条には、興福寺大乘院門跡尋尊が松南院大輔清賢へ「天川弁才天圖繪」の制作を依頼し、同年二月二日に完成した旨が記録される^{（一〇）}。さらに、永正元年（一五〇四）九月六日条では、堯仙房専秀に「天川弁才天一福」を譲渡したとある^{（一一）}。この「天川弁才天圖繪」については、十臂弁才天であるかを確認する術が無い。しかし、現在、奈良県能満院には二幅の天川弁才天曼荼羅が所蔵されており、一幅は南都絵所吐田座に属した琳賢によって、天文一五年（一五四六）に制作されたものであり、もう一幅は、詫間法眼筆と伝えられるものの、作風からは一六世紀に南都絵所で制作されたものとみられる。すなわち、高野山において遅くとも一六世紀初頭より十臂弁才天に関わる聖教が転写されはじめる一方で、南都では興福寺を中心として絵画作品が制作されているのである。

信仰の伝播者

以上のことから、天川・南都・高野山の三所が天川弁才天の信仰拠点として挙げられる。また、この三所を行き来し、十臂弁才天の信仰伝播に主体的役割を果たしていた者として、当山派修験者が想定されよう。当山派修験は、熊野・天川・吉野、そして南都を活動拠点としており、中世において急速に真言化がなされた興福寺や、その末寺の堂衆によって組織された一派である。関口真規子氏によれば、中世後期に興福寺東西金堂衆の統率下から独立した当山派は、以降も興福寺との関係を持ち続けており、さらには、明応元年（一四九二）をさほど遡らない時期に、高野山・粉河寺・根来寺の行人が加入していったという^{（一二）}。高野山行人の当山派加入は、十臂弁才天に関わる聖教が転写されはじめる時期と重なるものであり、このことが、高野山における十臂弁才天信仰の受容をさらに加速させたと考えられよう。

また、本史料にまつわる口伝が、空海の弟子であるとともに、当山派の流祖と仰がれる聖宝の師である真雅に仮託されていることも見逃せない。当山派修験者には、新たに作られた十臂弁才天法の正当性を示すべく、具体的な相承を示す必要があったのではないだろうか。すなわち、真雅に仮託した口伝を示すことで、空海より真雅、真雅より聖宝、聖宝より当山派修験者という、一連の系譜を示すことが可能となるのである。

まとめ

本史料の由緒が高野山の草創に天川をからめて語られることや、真雅に仮託した口伝が末尾に記されることを考え合わせると、一五世紀末から一六世紀半ばにかけて、高野山および南都の真言系宗教者を中心に十臂弁才天の存在が認知され、絵画作品や、偽経・次第が制作さ

れる機運が高まっていたと言えよう。その両所を繋ぐ役割を果たしていたのが、天川周辺を中心に活動していた当山派修験者だったと考えられる。

天川弁才天に先んじて歴史の舞台に姿を表す宇賀弁才天は、その信仰形成に台密が深くかかわっていたことが、山本ひろ子氏の研究によって明らかにされている¹⁾。本史料の存在は、そうした宇賀弁才天が中世以降、現代にいたるまで信仰されてきた一方で、高野山・南都を中心に、真言系の弁才天信仰が形成されていたことを示していると言えよう。

【注】

- (一) 『仏書解説大辞典』五巻、大東出版社、一九六四、二〇〇頁。
- (二) 『国書総目録』四巻、岩波書店、一九九〇。
- (三) 大森照龍「特別展における弁才天・荼吉尼天像について」『第十五回高野山大宝蔵展 天部の諸尊』、高野山霊宝館、一九九四、一五一―一八頁。
- (四) 伊藤聡「吉田文庫所蔵の弁才天関係偽経について―その翻刻と紹介―」『むろまち』第二集、一九九三、四〇―四六頁。
- (五) 『増補改訂日本大蔵経』九三巻、鈴木学術財団、一九七六。
- (六) 宮家準「金峰山秘密傳」『増補改訂日本大蔵経』九九巻、鈴木学術財団、一九七八、二九一―二九二頁。
- (七) 山本ひろ子『異神…中世日本の秘教的世界』、平凡社、一九九八、三二六―五〇二頁。
- (八) 前掲註四

(九) 伊藤聡「大須文庫蔵『宇賀神功能経』」『國學院大學日本文化研究所紀要』七七、一九九六、一一七―一四八頁。

(十) 『大乘院寺社雜事記』九、角川書店、一九六四、一七五頁。

(十一) 『大乘院寺社雜事記』一二、角川書店、一九六四、一七頁。

(十二) 関口真規子『修験道教団成立史…当山派を通して』、勉誠出版、二〇〇九、一二九―一七五頁。

(十三) 前掲註七

【凡例】

- 一、本翻刻は、金剛三昧院蔵・高野山大学図書館寄託『十臂弁財天』（請求番号／普六三金三四）を底本とした。
- 一、原則として常用漢字を用い、虫損・判読不能の文字は□にて示した。
- 一、判注部分は「」を付し、改行部分を斜線にて示した。
- 一、改頁にあたっては、下部に鉤括弧を付し、（ ）内に丁数を示した。
- 一、合略仮名は常用仮名に改めた。

【翻刻】

『十臂弁財天法』（普六三金三四）縦一六・八×横一六・〇

長老坊 仙弘

十臂辨財天法

觀一行ヲ祈ニル現當悉地ヲ然ハ則チ三

微妙法ヲ四弁八シテ一音遍シ法一界二聞ヲ

者ノ悉ク發ス大一心即チ海中ノ諸ノ
山河ノ諸ノ龍等佐ニ助ス宝珠ヲ増ス
威光ヲ雲ヲ發シテ天ヨリ雨ニ善風ヲ

雨一生ニ長ス天下万物ヲ此即海
中龍ノ宮ノ宝珠ヲ并ニ精進

峯「在口伝」冥會不ニカ故此ノ宝一珠

反シテ成ニ辯才天「伝^ル^カ神」其ノ形三頭蛇形^{ナリ}

身ニ着ス天一衣ヲ頂上ニハ三裸如意

宝珠アリ自レ口ニ裸吐ク如意一黒

色ニシテ具ニ足セリ十臂ヲ左ノ第一ノ手ニハ

持ニ如意宝珠ヲ第二儀ヲ第三ハ

乳一粥第一四ハ宝一珠第五ハ宝經

右第一ノ手ニハ持ニ如意宝珠ヲ第一

二釜第三ニ甘露第四ハ宝珠

第五ハ鎚足ニ水火ノ二天ヲ踏ミ左

右ニ吉祥訶利帝供ニ養ス天女ヲ

三王子各ノ七珍万宝ヲ授ク衆生ニ

各ノ蛇頭人形也上ニ有ニ三角之

飯山一左一右ニ有ニ臺ト瓶ト下ニ有ニ

宝珠一又有ニ牛王一无量ノ眷属

前後左右ニ周遍圍繞セリ

次七處加持「如来拳印」

次大虚空蔵 印明

次小金剛輪

次送車輅

次召請「蓮華合掌二大指召小呪」

次四明 次拍掌「如常」

次結界「彈指三度巽ヘスル」

「(五・ウ)」

アキヤナウセンナラボウチニ
タイクハハツ ウンハツタ
帝結婆々々吽發吒
菩底你

次虚空納 次火院

次大三昧耶 次闍伽「真言」

三保路々々水灑^ヲ

次花座「四葉印ノ口伝」皈命^ヲ

次振鈴「如常」 次前供養

次埋供 次事供

次讚「四智拍掌」 次孔雀經讚「合常」

曩莫^{ソト}摩都冒駄耶

曩莫^{ソト}摩都冒駄耶

曩莫^{ホキタ}摩都目記多耶

曩莫^{ホキタ}摩都目記多耶

曩莫^{センタ}摩都扇多耶

曩莫^{ヒボキ}摩都扇多耶

曩莫^{ホキ}摩都尾目記多耶

曩莫^{ホキ}摩都尾目記多耶

次普供養「用虚空蔵明ノ求聞持ノ呪三返」 三力

次祈願 次礼佛「合常」

南無摩訶毘盧遮那佛

南無本尊界會宇賀神王弁才天「三返」

南無十五王子并三王子四大眷属

南無兩部界會一切諸佛菩薩

次入我々入「秘法界定印」

想我心月輪中ニ有ニ^ル字「反成ニ

宝珠一々々則舍利ナリ放ニ光明一遍ク

照ニ法界一我カ己一鉢宝珠ナリ光ノ中ニ雨ニ珍

宝一施^ミ玉ヲ衆生ニ宝珠反シテ成ニ字賀神

「(七・オ)」

「(九・オ)」

「(六・オ)」

「(八・オ)」

「(六・ウ)」

「(八・ウ)」

十臂天女ト三大王子四大眷属并

迦一留一羅善一女龍一王十五童子部

類眷属我レ開ニ繞シ本尊ト本尊我カ身

中ニ入テ我ヲ加持シ玉フ亦本尊ノ御

身中入テ奉レ皈ニ一依本尊一故本尊

我一鉢ニシテ万法成就圓滿ス

次本尊加持「五種印明加次下次第在」

先大精進「宝印外縛二頭立合如二宝形一」

二大指入掌／外縛二中二頭宝形」

アウケンナウマニハサワツク
宝形二大ニ頭側付之掌中開之」

次本尊「左右手合掌二中指外又二頭」

宝形二大ニ頭側付之掌中開之」

キヤ、ナウウンハサラコ
又呪ウカヤ、ロテイムヘイ

又呪ウカヤ、ロテイムヘイ

可也

次善女龍王印「左仰心置右拳覆／内三廻有レ地思へ」

次善女須臾賀耶「三返」

次迦留羅王印 左拳腰ニ安右

拳心置大指上三度召「口云右頭指／形大指」

次迦樓羅摩尼惹耶嚕帝曳

嚕嚕可也

次塔印「右大開／左大開」二空合立

次二風召

次塔印「左右ノ地水火ヲ開テ」三度召」開テ

可也

可也

可也

次正念誦「本尊呪

次字輪觀 法界定印

可也

次本尊加持 如前

次釋迦鉢印 皈命

次寶生印「外縛二中指宝形」

次寶菩薩「外縛二頭宝形」

次愛染王印「外五古大呪用之」

次摩訶羅我縛日羅瑟尼灑

縛日羅薩拏婆惹吽錢斛

次弁財天根本印「八葉印／十指宝殊十觀スル」

次十方法界宇賀召請印

左安レ腰ニ右拳シテ以頭指召

次第一王子玉女神「外五古印」

次第二王子愛敬神「半敷蓮／口伝在」

次第三王子「大黑天神印右刀印／左拳右腰」

次吉祥天女印「八葉印召之開蓮／合掌」

次摩訶室哩「二合」野曳

次訶利帝「八葉印／口伝外ニ召」

次水天火天惣印「左拳心置右開三度向身ニ召」

可也

可也

可也

可也

可也

可也

可也

可也

可也

「(九・ウ)

「(十・オ)

「(十・ウ)

「(十一・オ)

「(十一・ウ)

「(十二・オ)

「(十二・ウ)

「(十三・オ)

一七日間奉勤行法結願當_レ此_ノ座_ニ

天文廿一年「壬子」九月一日書之

〔十六・ウ〕

「(十七・オ)

字 アラタンナウマニハサラ

字 列イタンナウサンハムハ

字 可イ列イタンナララン

十二丁

字 キヤくナウウンハサラコク

又呪

字 五口ロテイキヤラヘイ

「(十七・ウ)

(以降一丁白紙)

〔謝辞〕

本紹介を作成するにあたって、史料を所蔵される金剛三昧院をはじめ、管理される高野山大学図書館の各関係者の方々より格別の御高配を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

高野山金剛三昧院蔵『十臂弁財天法』の翻刻と紹介

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

鳥谷 武史

An Interpretation and Transcription of “Jippi-Benzaiten-Ho” Preserved at the Kongosanmaiin Temple

TORITANI Takefumi

Abstract

This paper aims to interpret “Jippi-Benzaiten-Ho” text preserved at the Kongosanmaiin Temple and explain its contents. Jippi-benzaiten is a deva with three snake heads and ten arms, and this text describes the method of the Jippi-benzaiten’s ritual. The text is preserved by Kongosanmaiin temple, but is deposited at Koyasan university library. The Kongosanmaiin temple has several texts about Jippi-benzaiten, written from the end of the 15th century to the 16th century.

“Jippi-Benzaiten-Shidai-Kuketsu,” introduced by the previous study, is preserved at the Shinnoin temple, and is an example of how “Jippi-Benzaiten-Ho” was transferred from the same text. On the other hand, “Bussetsu-Benzaitenryo-Kyo,” which is written about Jippi-benzaiten in narrative form, is considered the scripture that accompanies “Jippi-Benzaiten-Ho”.

“Jippi-Benzaiten-Ho” describes the methods of the Jippi-benzaiten’s ritual sequentially, and it is remarkable that its contents have much in common with the Tenkawa-benzaiten-mandala (the painting depicting Jippi-benzaiten). It is believed that this text was written using the “Kinbusen-Himitsu-Den” as reference.

Several paintings of Jippi-benzaiten were created in Nara in the 16th century.

The texts about the Jippi-benzaiten were written in Koyasan during the same era. A mountain ascetic called Tozan-ha, had propagated the faith of the benzaiten in Nara, Koyasan, and Tozan-ha-shugen-ja.

Keyword

Tenkawa-benzaiten, Jippi-benzaiten, Kongosanmaiin temple in Koya city, Tozan-ha-shugen